

2024 年度 入学試験問題

国 語

(第 4 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、問題を作成するにあたり、本文には一部表記を変えたところと省略したところがあります。

数十万年先に、人間はどのような姿形になっているのだろうか。そうした人間の未来について考えてみよう。

人間は動物と異なり、その進化には二つの手段がある。一つは他の動物と同様に、遺伝子を用いた生物的進化である。もう一つは、技術である。

人間は技術によって、その能力を格段に拡張してきている。例えば、携帯電話を使えば、遠く離れた米国にいる人とも話しをすることができる。人間の聴覚や発話能力を、格段に進化させた結果だと言ってもよい。また月に行きたければ、ロケットを使つて行くこともできる。

これらの進化は、おそらく遺伝子では実現することはできないだろう。いくら遺伝子を改良しても、未来において生身の体で、日本に住む人間と米国に住む人間が、直接話しができるようになるとは考えられない。それに、そんなことができる生物はこの世に存在しない。また、いくら遺伝子を改良しても、月に行くこともできない。そもそもタンパク質でできている遺伝子は、放射能に溢れる宇宙空間で生き残ることはできないだろう。

このように、人間は遺伝子に加えて、技術という進化の方法を手にした。そして、その技術による進化は、遺伝子による進化よりもはるかに速度が速いのである。

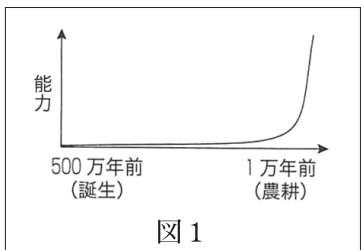
技術による人間の進化は、その技術の発明とともに始まった。図1は、その進化の様子を表している。五〇〇万年前に人類が誕生し、一万年前に農耕が始まった。それ以来、技術は加速度的に発展してきており、その技術の発展に伴い、人間はその能力を加速度的に拡張してきた。

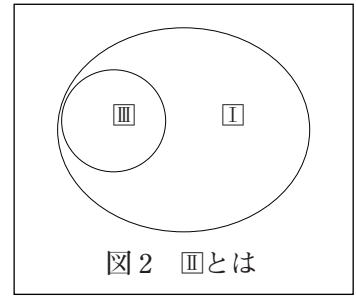
【A】人間の定義とは何か？ 人間とは何か？ これらの疑問に答えることは

できない。これらの疑問の答えは、人間が人間として生きながら、探し続けているものだと思う。大学において多くの学問を担う学部があり、それらのほとんどが、究極には人間とは何かという問いに答えようとしている。法学しかり、医学しかり、^②教育学しかり、それぞれの視点から人間を探究しているのである。

そうした、いまだに理解ができない人間であるが、少なくとも言えることは動物とは異なるということである。動物は技術を持たない。動物は技術によって文明を築いていない。すなわち、

〈人間とは、動物と技術を合わせたものである〉





ということは間違い^{まちが}ない。少々乱暴に人間を模式的に表せば、図2に示すようなものであろう。

動物と技術を合わせた人間なのであるが、現代の人間はその活動の多くを技術に頼^{たよ}っている。技術なしでは生きられないと言っても、過言ではない。住んでいる家やビルはもちろん技術の産物であり、また周りの山や川も土木技術によって整備されている。都会においては、人間の手が入っていない純粋^{じゆんすい}な自然を見つけることは、ほぼ不可能であろう。

【B】

人間の体も同様である。服を着て、メガネをかけて、片時も離さずスマートフォンを手に握^{にぎ}りしめている。さらには、その体の内部には、骨を支える金属や人工臓器を入れている人も少なからずいる。

そう考えれば、人間の中身のほとんどが技術によって支えられ、一部が動物的なものとして残されている可能性を考えていいだろう。図2に示されるように、人間はすでにその活動の大半を、技術によって支えられているのかもしれないと言ってもいいのではないだろうか。

一方、その動物的なものとは何かであるが、例えば脳はまだ生体のままである。近い将来ブレインマシンインターフェイスで拡張される可能性は十分にあるが、今のところ脳は、動物的な組織として残されている。

そしてこのような人間は決して、技術開発を止めない。

人間は能力を拡張して生き残っていくという、遺伝子に刻み込まれた使命に従って、その能力を拡張し続けている。

【C】

でも、人類の歴史において技術が衰退^{すいたい}したことはほとんどないのである。ただ、実際には少しはある。産業革命のころにイギリスで起こったラッダイト運動では、機械が人間の職^{うぼ}を奪うという懸念^{けんねん}から、機械が壊^{こわ}された。また中国の文化大革命においても、科学技術の発展が抑制^{よくせい}された。しかし、これらの出来事は、長い世界の歴史においては、比較的短期間で「ア」なことであり、技術はどんどんと発展し続けている。温暖化をもたらしことからCO₂排出量削減^{はいしゆつ さくげん}のため、いまの生活が問われているが、その解決も技術開発によるところが大きいと思われる。

こうした^③技術の発展の先には、今の人間が技術だけで構成される存在になる日が来るかもしれない。図2では人間の活動の大半が技術に支えられ、技術に置き換えられてきていることを示した。そして人間の中に残された動物的な部分としては、例えば脳があると説明したのであるが、その脳も近い将来、コンピュータに置き換えられる可能性は十分にある。

コンピュータの性能は年々向上し、しばらくすれば圧倒^{あつとうてき}的な計算能力を持つ量子コンピュータが実現される可能性もある。

現時点において、タスクを明確に定義すれば、コンピュータはほとんどのタスクにおいて、人間を超える。例えば、将棋や囲碁はコンピュータのほうが圧倒的に強い。記憶や計算能力は、人間はコンピュータの足下にも及ばない。絵を描いたりするのも、平均的な人間よりもコンピュータのほうが芸術的な絵を描くことができるだろう。

しかし、今、この章で議論しているのは、数十万年先の未来である。そうした未来において、今の人間の脳よりコンパクトで計算能力の高い、コンピュータの人工頭脳が実現できることは疑う余地がない。またそういったコンピュータの実現以前に、人間の脳はブレインマシンインターフェースによってインターネットと結合し、その能力をインターネット上のクラウドコンピュータで飛躍的に高めることになる。

いずれにしろ、人間は残されたわずかな動物的な部分を機械に置き換え、未来においては完全な技術だけで構成される存在になるであろう。これを私は人間の無機物化と呼んでいる。厳密には有機物も残るのであるが、タンパク質などの複雑な有機物ではなく、主に機械を構成する無機物で構成されるようになる。すなわち人間の無機物化とは、人間が機械で構成されるロボットになるという意味である。

ここで大事なことは、人間をはじめとする生物は無機物から生まれたということである。最初地球には、有機物（生物）は存在していなかった。すなわち無機物だけの世界であった。その無機物だけの世界に、有機物が登場し、有機物が進化して人間が生まれたのである。すなわち、

〈人間は無機物から生まれ、無機物に戻ろうとしている〉

のである。

四五億年前、地球が誕生した。三五億年前、その地球に有機物、すなわち生物が誕生した。その生物の最も進化したものとして、人類が誕生し、現在その人類は、その活動や体を再び、無機物に戻そうとしている。

人間という有機物はどうして、存在したのだろうか？ 人間を構成するタンパク質のような複雑な有機物は、環境適応性が高い。遺伝子の仕組みによって、どんどん環境に適応する。しかし、一方でその複雑な構造は壊れやすく、永遠に維持することができない。

【D】

数十万年経てば、地球の温暖化が極度に進み、生物が住める環境ではなくなるかもしれない。また太陽に異変が起こり、地球は強烈な放射能にさらされるかもしれない。未来において何が起こるか解らないのである。そうした不確定な未来においても、確実に生き残れるのは、宇宙空間でも生き残れる無機物だけかもしれない。

そう考えれば、

〈人間という有機物の体は、物質の進化（知能化）を加速させるための、イな手段にすぎない〉

のではないかと考えられる。

〈私たち人間の目的は、より長く生き延びられる無機物（ロボット、機械）の体を手に入れること〉

であり、そのために、今有機物の体を持つ私たち人間は、一生懸命に技術を発展させて、その体を無機物化しようとしているのではないだろうか。

人間はどうしてこれほどまでに、技術に憧れ、技術に執着しているのか。それは、ウ。今のところこの仮説は、かなり有力に思える。

日常的な社会問題を考えていると、生物や人間の進化について忘れてしまうことがある。進化とは、既存の生物からより優れた新たな生物が生まれることである。また、技術で進化する人間の先に現れるのは必ずしも、生物でないかもしれない。

しかし、この進化が停止し、人間が今のままであり続けることはないだろう。いまだに人間は多くの病気や環境変動に悩まされ、毎年多くの人が命を落としている。まだまだ進化の余地がある。

それゆえ、人類が哺乳類から誕生したように、未来において、人類から新しい人類が誕生する可能性は十分にある。

【E】

おそらくそういった進化は突然起こるものではなく、徐々に人類の中から発生し始め、徐々にマジョリティを占めるようになるのだろう。その新たな人類の発生はすでに始まっているかもしれない。私たちが夢中で開発しているロボットやアンドロイドやCGのエージェントはもしかしたら、そうした人類の産声なのかもしれない。

人類の先にどのような人類が現れるのか。すでに私たちの社会の中に生まれ始めているのか。そうしたことに思いを馳せると、胸がおどるのは私だけだろうか。

人間の先に現れる、今の人間がめざすもの。それは、

〈無機物の知的生命体〉

なのかもしれない。

（石黒浩『ロボットと人間―人とは何か』より）

問1 次の段落はもともと文中にあったものです。どこに入れるのがふさわしいですか。最もふさわしい場所を【A】～【E】から一つ選び、記号で答えなさい。

人間の能力を拡張する新しい技術は、この世に生き残るといふ使命を帯びた人間にとっては、非常に魅力的なものである。ゆえに、それを手に入れ、生活を豊かにすることが、人間の生きる目的であり、経済の発展を支えている。しかし、それにより環境をこわしているという事実もある。

問2 空らん ア・イ にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

ア	1 局所的	2 一般的	3 飛躍的	4 経済的
イ	1 有効的	2 発展的	3 革新的	4 一時的

問3 ——線①「遺伝子を用いた生物的進化」とありますが、遺伝子がいられることのメリットを解答さんの「〜ということ。」につながるように文中から八字でぬき出しなさい。

問4 ——線②「教育学しかり」とはどういうことですか。それを説明した次の文の空らん にあてはまることばを文中から二十五字でぬき出し、はじめと終わりの三字で答えなさい。

教育学は ということ。

問5 図2の空らんⅠ～Ⅳにあてはまることばの組み合わせとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1	I 人間	II 動物	III 技術
2	I 動物	II 技術	III 人間
3	I 技術	II 人間	III 動物
4	I 動物	II 人間	III 技術

2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、問題を作成するにあたり、用字とかなづかいを改めたところがあります。

時は文久元年（一八六一）の春。十八歳の青年清水信之助は父母を亡くし、甲斐の名家を相続したが、家はすでに傾いていたことを知った。そこで信之助は身を起すために新時代の幕開け近い動乱の江戸へと旅立った。信之助の思い人である香苗はその戦に赴く信之助を霧深い中いつまでも見送っていた。しかし、信之助の姿はなぜか思い出せなくなってしまった。

更に幾年か経って、世は明治と改元された。

そして秋が来たとき、高原の西の方にある村へ、維新の戦で傷ついた青年の一人が帰ったという噂がひろまった。

その噂を耳にするとすぐ、香苗はその村へ出掛けて行った。

（中略）

「……知っています」

青年は訪ねて来た香苗を、横庭の池の方へ導きながら語った。

「清水信之助とは伏見の戦争で同じ隊にいました。彼は勇敢な男で、命知らずという名を取っていました。……そうです。私は彼と一緒に寝ました。同郷だということを知ってからはいつも同じ席で眠り、同じ鍋から菜粥を啜りました。二年のあいだそういう風に戦っていましたが、……私がこの右足を失った日に」

彼はそう云いながら、添木を当てた右の太腿を見やった、それは膝の上から切断されていた。

「その日に、……あの方は？」

「清水と私とは別れ別れになりました、それ以来、私は彼を見ないでしまいました。……集中して来た砲弾が私たちの小隊を全滅させたのです。生き残ったのは、……片足を失った私と他に、人夫が二人だけでした」

「ではあの方は、あの方は……信之助さまは」

「私は二度と彼を見ませんでした」

青年は遠くの空を見やって咳をした。それから、苦しそうに松葉杖を突いて、頭を振りながら池の畔を廻って立ち去った。

香苗は家に帰って来た。……そして自分が少しも泣けないのに気付いて驚いた。……少しも泣かなかつた、少しも、……信之助が死んだという青年の言葉は、なにかしらアことのように感じられ、まるで知らぬ世界の知らぬ人の話としか受け取れなかつた。そして、

——きつと帰る、必ず帰って来る。

こうして約束すると、刀の柄を叩きながら云った信之助の声の方が、青年の話よりも強く鮮やかに、もつと生々して耳に蘇って来た。

その冬、初めての雪が降り出した頃、香苗の家は遂に倒産した。……明日はその屋敷を立ち退かなければならぬという、その前夜のことである。庭先に激しい物音がしたので、なにごとか出て見ると、三十尺も高く伸びていた辛夷の木が倒れたのであった。

香苗は自分の部屋の窓をあけてそれを見た、枝を張り過ぎた辛夷は、雪の重みを支え兼ねて根元から折れたのである、……香苗はそれを見たとき恐ろしい悲鳴をあげながらうち伏した。

「信之助さまが、信之助さまが」

声をふり絞って狂おしく叫んだ。

父や母や、別宴のために集まっていた親族の人々が驚いて駆けつけた。……香苗は身もだえをし、裂けるような声で信之助の名を呼びながら泣いた。

また会う日のために、二人が取り交した約束の花、その辛夷が倒れたのを見て、香苗は信之助の死が本当だったということを感じたのである、……いや、雪の上に倒れている辛夷の木が、そのまま信之助の死体のように見えさせたのだ。

香苗は泣いた。別れて以来いちども泣いたこともない香苗が、そのまま泣き死んでしまうかと思われるほど激しく泣いた。

……そして、一家が甲府の町へ移って行く日、彼女は代々の檀那寺である桂円寺に入つて髪をおろした。

香苗の涙の日が始まった。

春いくたび。……秋いくたび。

高原の村にも、年々の世の移り変わりは伝わって来る、江戸が東京となり皇居が御東遷になった。諸藩が廃されて府県が置かれた。佐賀の乱が起こり、薩摩の乱が起こった。人々はもう鬪を切っていたし、刀を差すことも禁ぜられた。マントルを着た役人や、帽子をかぶった人も珍しがられなくなり、やがて新聞がこの高原の村々にも配られだした。

香苗は桂円寺にはいなかった。

いつかの日、信之助と別れたふたまた道の畔に、^①小さな草庵を建て、朝夕を静かな 看經に送り迎えしていた。……ときおり彼女の頬には涙の跡があったけれど、眉にも眼許にも、今は心の落ち着いた静かさが溢れている。たとい少しばかり愁いと哀しみの色が現れたとしても、却つてそれは慈悲の光を加えるとしか見えなかった。

清国との戦争が布告されたとき、香苗は高原から下りて、街道の町はずれにささやかながら一棟の救護院を建てた。……ようやくゆききの繁くなった旅人たちのなかで、貧しい人々には食を与え、病者には薬と部屋とを与えるためである。

それからのち数年のあいだ、香苗は朝早く草庵を出て救護院へ通った。……そこには常に二人から十人までの貧しい旅の病人が引き取られていた、多くても十人は越さなかったし、少ないときでも二人より欠けたことはなかった。

或早春の朝、彼女が救護院へ行くと、そこには前日までいた二人の姿がなくて、新しい一人の

老人が寝かされていた。

「珍しいこと、一人だけになりましたね」

「はい、昨日までいたあの二人は一緒に出て行きました、そのあとでこの老人が運ばれて来たのです」世話役の老婆が粥を作りながら答えた。……月心尼（香苗の法名）は静かに病人の枕許へ近寄って見た。老人の髪は銀のように白く、額には斜めに刀痕があった、……上品な眉とくち許が、その刀痕と共に老人の身分を語っているように思われた。彼はよく眠っていた。

「普通の御病人とは違うようでございますよ」

老婆が囁くように云った、「お召物も立派ですし、お口の利きぶりも御様子も上品でございますの、そしてお供の人をつれていたようなお話でございましたが。……お気の毒なことに頭を悪くしておいでだそうで、そのお供さんともはぐれ、此処まで来て病気におなりなすったのでございますね」

「それはお気の毒な……」

月心尼がそう頷いたとき、その老人が不意に床の上へ起き直った。……あまり突然だったので、月心尼も老婆もあつと胸をつかれた。

「ああ見える」

老人は大きな眼をみはりながら叫んだ、「……錦の御旗が、……砲煙の向こうに、槍や刀がきらりと光っている向こうの方に、朱い朱い、美しい錦の御旗が見える」

「若し、……若し、どうなされました」

月心尼は急いで側へ寄った。「……心をお鎮めなされませ、此処は甲斐国の田舎町でございます、戦はもう昔のことでございますよ、大砲も刀も槍も此処にはないのですよ」

老人は振り返って彼女を見た。……なんの色もない、虚ろな眼であった。彼はまじまじと月心尼の顔を見まもっていたが、やがて寂しそうに首を振りながら云った。

「なにか、云ったのですね。……失礼でした、すっかり頭が狂っているものだから。……自分でも訳の分からぬことを云うのです、時々。……恐らくまたあの戦のことを申したのでしょう」

「戦争でお怪我をなすったのですね」

「そうです、伏見の戦でした、敵の砲弾にはね飛ばされて」

「伏見。……伏見の戦で砲弾に……」

月心尼は突き飛ばされたように身を退いた。忘れることの出来ない言葉である、それは既に遠い昔のことであった、秋の日盛りに訪ねて行ったあの村の青年から聞いて、もう三十余年の月日が経っている。……けれど月心尼の心にはまだ昨日のこのように生々しく残っている言葉だった。

「あなたは鳥羽で、鳥羽で戦ったのですね、鳥羽の戦で大砲の弾丸に。……それでは若しや、若しやあなたは、信之助さまではございませんか、清水信之助さまでは」

「信之助……清水……」

老人はげんそうに首を振った、「……私の名は松本吉雄と云います、それに、……そういう名の人は知りません」

「よく考えて下さいまし」

月心尼は力を籠めて云った、「心を鎮めてよく思い出して下さい、あなたは信之助という名に覚えはありませんの？　ずっと昔、霧のふかい朝、香苗という娘と別れたことはありませんの、必ず帰って来ると云って、また会う日の約束に辛夷の花を一輪ずつ、お互いに持ち合って別れたことはございませんか」

老人はじつと眼をつむっていた。そして暫くすると静かに首を振って云った。

「御尼僧。……あなたも、誰かを待っておいでなのだな」

「……………」

「出来ることなら私は、その人だと云ってあげたい、けれど。……私にも捜している者がいるのだ、あなたが待っているように、私にも私を待っていてくれる者がある。……私は大野將軍の副官として些かの働きをした功で、將軍の家に引き取られていた、そこにいれば安穩な生涯が送れた。……けれど私は、そこを出て来たのです、私を待っていてくれる人に会いたいと思ったからです」

月心尼は老人の言葉を夢のように聞いていた。……聞きながら老人の顔を食い入るように見まもった、どこかに信之助の傍がありはしないかと思ったのである。……けれど、別れて以来殆んど四十年になる今では、そして多くの辛酸に揉まれて、遥かに青春から遠ざかっている今では、たとい其の人としても直ぐ見分けのつく筈はあるまい。……月心尼の胸は、新しい失望に刺されるような痛みを感じた。……老人は間もなく横になった。

その夜、草庵へ帰った彼女は、東京の大野將軍に宛てて手紙を書いた。

(中略)

彼女は手紙を出した。

そして其の日から草庵に籠ってしまった、返事の来るまでは外へ出る気もしなかったのである。……霧の下りて来る季節で、朝な朝な、草庵の周囲は灰白色の帷に包まれた、そして日が高く昇ると、雪のある甲斐駒の嶺が眩しくきらきらと輝いた。……月心尼は草庵のなかに坐つたまま、終日看経していた、心は静かに澄んでいたし、眼には仏の慈悲を思わせる浄光が溢れていた。

その朝もふかい霧だった。

一人の配達人が東京からの返事を持って来た。……月心尼はそれを草庵の門口で受け取り、静かに庵室へ入って封を切った。……手紙は將軍の直筆で認められたものであった。

松本吉雄は自分が鳥羽の戦場で拾った男である、そういう書き出しであった。……敵の集中砲弾にはねられて頭をやられ、すっかり記憶力を無くしているが、勇敢な兵士として自分の部下でよく働いた。そして薩南の乱には自分の身代わりになって、敵の狙撃弾のため胸を射抜かれた。……彼の右胸にある弾痕が、自分の命を助けてくれた記念である。……彼は尋ね人があるからと

云つて自分の許を去つたが、不自由な身だから、若し其の地で困っているようならば是非面倒をみて貰いたい、此処に僅かながら金を封入する。

——そう書いた文面の末に、彼はもう自分の名も忘れているが、本名は清水信之助と云う者である。

と筆太に認めてあつた。

「ああ、……」

③ 月心尼は苦しげな声をあげた。……そしてその声よりも早く、彼女は立って、ふところから古びた紙包を取り出した。

「イ」の包である。

月心尼は草庵を出た。走るまいと勉めたけれど、いつか気付くと走っていた。なにも思わず、なにも見えなかつた。ただ足に任せて道を急いだ。

「ええあの御病人は、……」

四、五日見えなかつた月心尼を迎えて、世話役の老婆は静かに答えた、「……ゆうべ、さようです、ゆうべ暗くなつてから、ひよいと向こうへ出掛けておいでなされましたですよ」

「……………」

「さようです、ひよいど行つておしまいになりましたですよ、誰かあの人を待っているからおつしやいましてね。……月心さま、ですからもう一人も此処には居りません、この救護院はじまつて以来のことでございますが、一人もいなくなりましたですよ」

月心尼はなにも云わなかつた。

草庵へ帰る道はまだ霧に包まれていた。吹き下りて来る濃霧は、彼女の軀を取り巻いて渦のように揺れあがり、押し戻したりちぎれたりしながら流れ去つて行つた。

月心尼の頬には涙が縞をなしていた。けれど、いま彼女の泣いている顔には、これまでながいあいだ静かな、慈悲の微笑をたたえていたよりも明るく、活々とした望みの色が満ちていた。

「信之助さまは帰つて来ます」

月心尼は、いや香苗は、[※] そのかみ信之助と別れた道の上へ来ると、じつと眼を閉じながら呟いた。「……きつと、きつと、信之助さまは此処へ帰つていらつしやる」

突然、彼女の閉じた瞼の裏へ、あの日の信之助の姿が歴々と浮かんで来た。……別れた直ぐあとも思い浮かべることの出来なかつた信之助の姿が。……^④ 香苗はそのとき初めて、信之助を

自分の手に取り戻したように思った。

(山本周五郎「春いくたび」より)

※髪をおろした……尼僧となつたということ。

※マンテル……マントのこと。

※看経……お経をよむこと。

※そのかみ……その昔。

問1 空らん ア にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 わずらわしい 2 重々しい 3 ふさわしい 4 空々しい

問2 ——線①「小さな草庵を建て、朝夕を静かな看経に送り迎えしていた」とありますが、この時の香苗についての説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 信之助への思いに一区切りつけ、尼としての日常を送っている。
- 2 信之助のことを思いつつも顔には出さず、他人からは明るさが見える。
- 3 経を読むことに集中し、信之助のことを考えないでいる。
- 4 信之助を思い悲しみながらも、外見からは平静さが感じられる。

問3 ——線②「新しい失望」とありますが、これはどのような失望ですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 信之助はやはり死んでしまっているのだろうという失望。
- 2 信之助が自分のことをすでに忘れているのだろうという失望。
- 3 信之助に会ってもその人が信之助と気づかないのだろうという失望。
- 4 信之助の容姿が四十年経って衰えてしまっているのだろうという失望。

問4 ——線③「月心尼は苦しげな声をあげた」とありますが、この時の月心尼の気持ちとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 ずっと探していた信之助とすでに対面していたことが分かり、気持ちがいまいちかずにいる。
- 2 長らく探し続けていた信之助と会えたのに、また会えなくなってしまうことを悲しんでいる。
- 3 ずっと探していた信之助が現れたにも関わらず、気がつくことができなかった自分を責めている。
- 4 長らく探し続けていた信之助が、自分にまったく気づかなかったことに対して困惑している。

問5 ——線④「香苗はそのとき初めて、信之助を自分の手に取り戻したように思った」とありますが、香苗はどうしてそう思ったのですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 出征したときは信之助がもう戻ってこないと確信していたが、ここに至って再び会えるかもしれないと考えたから。
- 2 出征してすぐ思い出すことさえできなかった信之助の姿を、ここに至って改めてありと思い出せるようになったから。
- 3 出征した信之助と会えなくなることとぎれとぎれになってしまった記憶を、ここに至って取り戻すことができたから。
- 4 出征して二度と会えなくなった信之助のことを忘れるように努めたが、ここに至って再び姿を思い出そうと思いなおしたから。

問6 空らん イには二人にとって大切な「もの」が入ります。文中から最もふさわしいことばを四字でぬき出しなさい。

問7 本文の表現上の特徴としてふさわしくないものを次から二つ選び、それぞれ番号で答えなさい。

- 1 「……」を使うことで、会話の余韻や間が表現されている。
- 2 場面が出来事の起きた順ではなく、過去と現在を行き来してえがかれている。
- 3 会話の中に体言止めが多用されることで、人物の心情が強調されている。
- 4 時間や季節を表すことばを用いることで、場面の移り変わりが明確に示されている。
- 5 香苗のおかれた状況によって彼女の呼び方が変えられているところがある。
- 6 登場人物以外の第三者の視点から物語が語られている。

問8 本文を時間の経過に従って五つの場面に分けたとき、各場面における香苗の気持ちの移り変わりとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 不安と期待→絶望→悲しみと覚悟→期待と疑念→不安
- 2 失望と期待→絶望→悲しみと覚悟→期待と疑念→希望
- 3 不安と期待→絶望→悲しみと覚悟→期待と失望→希望
- 4 不安と絶望→諦め→悲しみと覚悟→期待と失望→希望
- 5 失望と期待→諦め→悲しみと覚悟→期待と疑念→不安
- 6 不安と絶望→諦め→悲しみと覚悟→期待と失望→不安

問9 この作品ではある自然現象が物語の世界をつくる仕掛けとして作用しています。この自然現象をふくみ、香苗に変化が起きたことを示す部分を文中から一文でぬき出し、はじめの五字で答えなさい。



3 次のA～Eの「百人一首」の歌とその現代語訳を読んで、後の問いに答えなさい。

A ちはやぶる 神代も聞かず 竜田川 からくれなゐに 水くくるとは
(不思議なことが多い神々の時代でも聞いたことがない。竜田川が鮮やかな紅色に水をしばらく染めに行っているさまは。)

B 山里は a ぞさびしき まさりける 人目も草も かれぬと思へば
(山里は、 a こそ特に寂しさがまさるものであるなあ。人も訪ねてこなくなり、すっかり草も枯れてしまうと思うので。)

C ひさかたの 光のどけき 春の日に b なく 花の散るらむ
(日の光がのどかに差している春の日に、どうして落ち着いた心なく桜の花は散っているのだろう。)

D 恋すてふ わが名はまだき 立ちにけり 人知れずこそ 思ひそめしか
(恋をしているという私のうわさが早くも立ってしまったなあ。だれにも知られないように、心ひそかに思いはじめていたのに。)

E たち別れ いなばの山の 峰に生ふる まつとし聞かば 今帰り来む
(あなたと別れていなばの国へ去ったとしても、いなばの国の稲羽山の峰に生えている c ではないが、あなたが d っていると聞いたならば、すぐに帰ってこよう。)

問1 Aの歌は竜田川に何が流れている情景を詠んだ歌ですか。現代語訳を参考にしてひらがな三字で答えなさい。

問2 空らん a にあてはまる最もふさわしいことばを現代語訳を参考にして次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 朝 2 夜 3 秋 4 冬

問3 空らん b にあてはまる最もふさわしいことばを現代語訳を参考にして次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 里心 2 下心 3 静心 4 一心

問 4 Dの歌の中で使われている表現技法を次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 倒置法たうちほう
- 2 直喩ちよくゆ
- 3 対句たいく
- 4 擬人法ぎじんぽう

問 5 Eの歌の——線「まつ」には二つの意味がかけられています。現代語訳の空らん c、
dに入れるのにふさわしいことをそれぞれ漢字一字で答えなさい。



4 次の各問いに答えなさい。

問 1 次の各文の――線のカタカナを漢字で書きなさい。

- 1 がんばったか**い**があつて**セイセキ**が上がってきた。
- 2 問題が**大きく**なる前に**タイショ**した方がよい。
- 3 古くなった校舎の**カイシュウ**工事が行われる。
- 4 **ジョヤ**の**かね**が鳴っている。
- 5 今後の手続きは**弁護士**に**ユダ**ねることにした。

問 2 次の各文の空らんには共通の部首を持つ漢字の熟語が入ります。文が的確に成り立つよう、空らんに入る熟語を答えなさい。なお、答えになる漢字はすべて小学校までに習う字です。

〔例〕親は子に無限の□□を注ぐものだ。〈ころ・りっしんべん〉↓「答え」愛情

- 1 ベテラン選手が□□をかけた大一番に**臨む**。〈しんしよう〉
- 2 リトマス紙で酸性かアルカリ性を□□する。〈りつとう〉
- 3 終戦七十年にあたり、**首相**が□□を発表した。〈ごんべん〉
- 4 映像を使って□□に**訴える**のが効果的だ。〈みる〉
- 5 秋に行われる神社の□□には多くの人が集まる。〈しめす・しめすへん〉

